

リーチ マイケルさん

ラグビー日本代表キャプテン

「ドンマイ」よりも、ミスの検証を

実感する人は少ないだろうが、日本は実はラグビー大国である。競技人口も世界で五、六番目くらいだし、世界ランクも十位前後。現在、その日本代表のキャプテンを務めるのは、ニュージーランド出身のリーチ マイケルさん。ワールドカッププイヤーの今年、その意気込みを聞いた。

ラグビー王国から日本へ

——ラグビーを国技とするニュージーランド（以下NZ）から来日して十一年になりますが、日本留学の経緯から教えてください。

僕は五歳でラグビーを始めました。NZの子供にとってラグビーといえば、なんといってもオールブラックス（NZ代表）です。子供のころ、ラグビーはヨーロッパやオーストラリア、フィジーで盛んなスポーツというイメージを持っていましたが、日本でラグビー

が盛んだとはまったく知りませんでしたね。僕が日本のラグビーと出会ったのは十三歳のときです。NZに遠征してきた日本の高校や大学のラグビー部と交流する機会がありました。みんなホントにうまかったので、びっくりしました。

——過去のラグビーワールドカップ（W杯）で日本代表はオールブラックスに大差で敗れています（*）。そのNZの少年が驚くほどのレベルなんですか？

高校生くらいまでは、日本とNZの差はさほどないと思います。日本の高校生は、パス、キック、タックルなどのスキルがすべて高い。初めて見たときは興奮

したほどです。日本のラグビーを知り、それでいつか日本に行ってみたいと考えるようになったんです。

十三歳で高校に入ると（NZの学制は小学校五年、中学校二年、高校五年）、第二外国語の授業でマオリ語（NZの先住民の言語）、フランス語、日本語の中から日本語を選んで勉強し始めました。そうするうちに、北海道の札幌山の手高校に留学していた幼なじみのニック・イーリー（現・パナソニックワールドナイツ）が「札幌に

来ないか？」と誘ってくれたんです。

子供のころからいつかは海外に行きたいとは思っていました。それに勉強ができるし、何より大好きなラグビーができる。このチャンスをもノにした、と強く思いました。母は心配して反対しましたが、父が「行つていい」と応援してくれました。

——十五歳で来日ですね。言葉や食事など苦労があったのではないですか？

いえ、全然（笑）。NZに本気で帰りたいと思ったことは一度もありません。下宿先がラグビー部の先輩の実家のお寿司屋さんだったので、ご飯がとておいしかったです。言葉も二年間勉強していましたが平仮名の読み書きと挨拶くらいはできました。英語を話せる人も多かったのでコミュニケーションも大丈夫でした。ただ、日本の町は想像とはまったく違いました。香港のようにゴチャゴチャした雰囲気なんじゃないかと思っていましたけれど、札幌は静かでした。人もそれほど多くないし、自然が豊か。とてもいい町だと感じました。

来日する前、「日本では約束の五分前に行かな



●リーチ マイケル 1988年生まれ。ニュージーランド・クライストチャーチ出身。2008年、アメリカ戦で日本代表デビュー。14年4月、エディー・ジョーンズヘッドコーチから日本代表キャプテンに指名される。ポジションはNo8、フランカー。好きな言葉は「神に誓うな、己に誓え」

（*）1995年第3回大会で17対145。2011年第7回大会で7対83。